

特別なニーズのある子ども安心して学べる学級づくり

山崎 幸代

金沢大学大学院教職実践研究科 学習デザインコース

【概要】本研究は、学級の中で全ての子ども達が安心して学べる環境を学級担任としてどうつくり出していくか、その学級づくりの道筋を明らかにしようとするものである。本研究では、毎日の帰りの会、特別活動や道徳の授業の中で、子どもが自分の力を発揮する場、周りから承認される場を継続的につくった。その結果、子ども達に他者の行動に気づき称賛する発言が多く見られるようになったり、他者のために行動する態度が見られるようになったりした。また、家庭においても物事に対しての積極性が高まるなど、子どもの心の成長と見られる態度の変化が見られた。したがって、本研究を通して、本学級は、子ども達が安心して学ぶことができる学級へと近づいたと考える。

I 問題意識

筆者は、これまで 20 年間学級担任をしてきた。ある高学年の学級を受け持った時は 4 月当初より、毎日のように子ども同士のトラブルが絶えなかった。また、ある低学年の学級を受け持った時は、登校をしぶったり、暴れてしまったりする子がいた。子ども達は何に困っているのだろうか、なぜこのようなことが起こるのだろうか、その原因として、人間関係がうまく築くことができないからなのではないだろうか、何か満たされない寂しさがあるからなのではないだろうかなどと考えてきた。

人間関係に悩んだり、寂しい思いをしたりして孤立することがない学級がつくられれば、子ども達は安心して学ぶことができるのではないだろうか。

以上の問題意識より、本研究は、学級の中で全ての子ども達が安心して学べる環境を学級担任としてどうつくり出していくか、その学級づくりの道筋を明らかにしようとするものである。

1. 教育現場の課題から

文部科学省による平成 28 年度「児童生徒の

問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」では、児童生徒の暴力行為発生件数、いじめの認知件数、不登校児童生徒数が、いずれも小学校低学年段階から増加している。

このことから子ども達が、人間関係づくりにおいて低学年段階から困難さを感じていると思われる。

また、文部科学省による平成 24 年「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」によると、知的発達に遅れはないものの学級の中の 6.5 パーセントの児童生徒が学習面や行動面で著しい困難を示すと言われている。

これまでの筆者の経験上、多くの子ども達は、希望をもち、わくわくした気持ちで小学校に入学してくる。しかし、特に特別なニーズのある子は、学年が進むにつれ、不安や緊張が見られる。それは、もしかすると、皆と一緒にできないことが増え、皆と違うことに気づいたりすることが関係しているのかもしれない。

これらの教育現場の状況をみて、果たして、子ども達にとっての学級は、「自分は自分のままでいい」という安心して学べる環境となっているのかと疑問をもち、実践を通して、安心し

て学べる学級について考えていきたいと思った。

2. 安心して学べる学級をつくるために

筆者が考える安心して学べる学級とは、子どもにとっての居場所がある学級である。そのような学級の中では自分の思いや考えが自由に言えたりこの学級でよかったと思えたりする。つまり学級の中で子ども自身が「幸せ」を実感できる学級でもある。

「幸せ」に関連して、菅野（2008）は、著書の中で、人間が幸福を実感する際、二つのモメント（契機）があると述べ、以下の表1に示している。

表1 菅野の著書より

「幸福」の本質的なモメント
① 自己充実
② 他者との「交流」
{ ① 交流そのものの歓び
{ ② 他者からの「承認」

「幸福」の本質的なモメントとして、一つは自己充実であり、もう一つは他者（自分以外の全ての人間）との交流である。この考えをもとに、筆者は、学校生活の中で、子どもが自分の能力を最大限に発揮しやりたいことができる場や他者から承認される場をつくり、教師が働きかけていくことで、安心した学級がつくられるのではないかと解釈した。その環境づくりや働きかけは、生活の中で継続的に実践していくことが必要だと考えた。

したがって、毎日の帰りの会、望ましい人間関係の基礎を育む特別活動や教育活動全体で行う道徳教育の要である特別な教科道徳の授業の中で、子どもが自分の力を発揮する場、他者から承認される場をつくり、教師の働きかけを工夫すれば、子どもが他者（友達）を理解し、自分を理解するようになり、安心して学べる学級がつくられていくであろうと考えた。（図1）

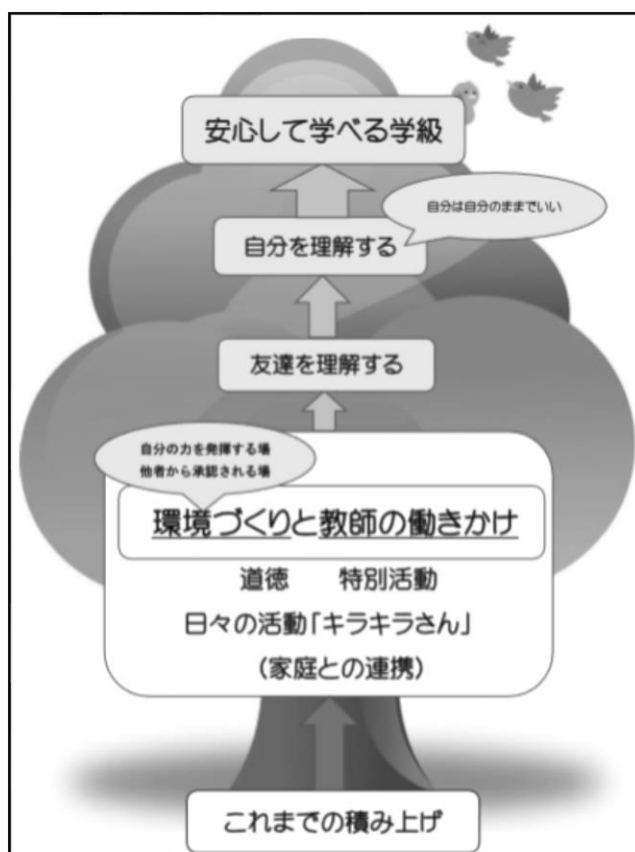


図1 研究の構想

II 研究目的

本研究の目的は、毎日の帰りの会、特別活動や道徳等の授業の中において、子どもが自分の力を発揮する場、承認される場をつくり、そこで教師の働きかけを工夫することにより、子ども達が安心して学ぶことができる学級づくりを提案することである。

III 研究方法

1. 対象

県内公立小学校 2年生の学級(34名)を対象とする。本校は1学年3学級規模である。

本学級の実態として、学力差が大きく、友達同士コミュニケーションを図るには、語彙力がまだ十分でない児童が多い。相手の考えや気持ちに気づくことができる児童がいる反面、自分中心に考えがちになる児童も多い。

また、本学級には、外国籍の児童が複数在籍し、児童の生活経験が多様である。転出入も多く、集団としての変化が多い学級でもある。

表 2 各抽出児童の実態と目標

	A児	B児	C児
実態	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉の意味理解△ ・表現△ ・見て理解し考える力，人の話を聞く力が弱い。 ・友達と関わりたいが，関わり方が分からない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉遣い△ ・表現△ ・言葉で理解し考える力が弱い。 ・友達と関わりたいが，うまく表現できないため，相手に理解されないことが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・平成 30 年 3 月に外国から日本へ来日したため，日本語が分からない。 ・友達と関わりたいが，言葉が分からないため，遊び方のルールがつかめず，遊ぶことができない。
目標	<ul style="list-style-type: none"> ・できることや分かることを増やす。 ・言葉や行動で友達とコミュニケーションがとれる。 ・話を聞くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と友好的な会話がでできる。 ・話し合いに参加することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の学校での過ごし方が分かる。 ・ルールにのっとって遊ぶことができる。

2. 抽出児童

本研究では、特別なニーズのある児童 3 名（A 児，B 児，C 児）を抽出して、彼らの学びや行動の変容を中心に観察する。その上で、彼らと学級の児童同士のつながりを考察することによって、安心して学べる学級づくりを提案することとする。上の表 2 は各抽出児童の実態とこの学級で安心して学べるようにするための目標である。

3. 実践計画

実践として、(1) 日々の活動、(2) 学級活動の授業、(3) 道徳の授業を計画した。以下にその簡単な説明を示す。

(1) 日々の活動

毎日の帰りの会に、その日に友達にってもらって嬉しかったことや友達のよいところを紹介する場を設ける。紹介された友達のことを「キラキラさん」とよぶことにする。「キラキラさん」と言われた人にとって、これが学級の皆から承認される場となる。

(2) 学級活動の授業

6 月から 11 月までに計 3 回、同一題材「友達ともっとなかよし」として、「友達となかよくするにはどういうことか」を活動の中で感じたり考えたりする授業を構想し、繰り返す。

(3) 道徳の授業

6 月から 12 月までに内容項目 A「個性の伸長」に関する授業を 3 回、内容項目 B「友情、信頼」に関する授業を 2 回、内容項目 B「親切、思いやり」に関する授業を 1 回、計 6 回行う。日々の活動や学級活動の授業との関連を図った授業を構想する。

4. 検証方法

授業の実施期間は、平成 30 年 4 月～平成 30 年 12 月である。名簿シートやフィールドノートによる行動観察記録、ICレコーダーによる音声記録（授業含む）、ビデオによる授業記録、児童アンケート、保護者アンケート、児童のふり返りから、抽出児童を中心とした児童の学びや行動の変容を分析し、検証する。

Ⅳ 実践結果とその考察

本研究に関わる実践は、表 3 の通りである。

表 3 実践について

	活動内容	活動の時間(期日)	ねらい
実践①	・日々の活動「キラキラさん」	帰りの会(毎日)	友達のよさを見つける。自分のよさに気づく。
実践②	「友達ともっとなかよし」① ・話したり聴いたりしながら、友達のことを知る。	学級活動(6月11日)	自分のことについて話したり、友達のことを聴いたりすることを通して、さらに人間関係を深めようとする意欲をもつ。
実践③	「友達ってどんな人なのかな?」 ・友達について話し合う。	道徳(6月21日)	自分にとっての「友達とは?」を考える。 【内容項目: B友情, 信頼】
実践④	・友達のよさを見つける。(ぼく)	道徳(7月5日)	友達のよさを見つける。自分のよさに気づく。 【内容項目: A個性の伸長】
実践⑤	「友達ともっとなかよし」② ・話したり聴いたりしながら、友達のことを知る。	学級活動(7月18日)	自分のことについて話したり、友達のことを聴いたりすることを通して、さらに人間関係を深めようとする意欲をもつ。
実践⑥	・「自分友達アンケート」の実施	朝の会(9月21日)	自分なりの「友達」や「なかよし」の意味について考える。
実践⑦	・友達のよさを見つける。(りょうたさんありがとう)	道徳(10月11日)	友達のよさを見つける。自分のよさに気づく。 【内容項目: A個性の伸長】
実践⑧	「友達ともっとなかよし」③ ・話したり聴いたりしながら、友達のことを知る。	学級活動(10月18日)	友達に自分のことを伝えようと話をしたり友達のことを知ろうと友達の話に聴こうとしたりする。 【思考・判断・実践】
実践⑨	・親切の意味やよさを考える。	道徳(10月25日)	やさしさ(親切)を見つけ、よさに気づく。 【内容項目: B親切, 思いやり】
実践⑩	「なかよしてどういうことなのかな?」 ・なかよしとはどういうことなのかを考える。	道徳(11月8日)	自分にとっての「なかよしとは?」について考える。 【内容項目: B友情, 信頼】
実践⑪	・「自分友達アンケート」の実施	朝の会(11月22日)	自分なりの「友達」や「なかよし」の意味について考える。
実践⑫	「自分はどんな人なのかな」 ・自分のよさは何かを考える。	道徳(12月6日)	自分のよさや自分のことに気づく。 【内容項目: A個性の伸長】

以下、実践の実際について述べていく。

1. 日々の活動「キラキラさん」(実践①)

(1) 1学期の「キラキラさん」の実際

① A児が初めて言われた時

5月7日、これまで「キラキラさん」で一度も言われたことがなかったA児の名前が登場した。「キラキラさん」の内容は表4の通りである。

表4 5月7日の「キラキラさん」 一部抜粋

I児: 今日のキラキラさんはAさんです。Aさんに学童で一緒に遊ぼうと言ったらいいよと言ってくれました。

発言したのは、I児である。I児はとても得意げな様子で発言した。I児は友達のよいところを見つけることに喜びを感じる児童である。

この日は、学校以外の学童での遊びのことに目を向けA児を誘った。「キラキラさん」として言われたA児は、驚いた様子であった。そして、恥ずかしい様子で下を向きながら、小さい声で「見つけてくれてありがとう」と、発言した。

② 発言内容の高まり

4, 5月は「遊んでくれた」「誘ってくれた」など、遊びについて、自分が友達から受けた単純な行為に対する発言が多かった。しかし、6月は、「困っている時手伝ってくれた」「給食のおかずがこぼれているのを拭いていた」などの遊び以外の場面で第三者として友達を認め称賛する発言が見られるようになってきた。

筆者は、それらを記録していく中で、児童の「キラキラさん」には、大きく二種類の内容があることに気づいた。一つ目は遊びに関する内容であり、二つ目は、相手のことを思ったり考えたりして行う優しい行為に関する内容である。そこで、前者を「遊びキラキラ」後者を「優しさキラキラ」として区別し児童と共有した。

③ トラブルの後の関わり

7月13日、A児が「今日のキラキラさんは、Bさんです。わけは、学童で遊ぼうと言ったらいいよと言ってくれたからです。」と発言した。B児は笑顔で反応を返していた。実は、この日、B児が発した悪口でA児が腹を立て、A児が教科書でB児を叩くというトラブルがあった。

トラブル後は、話し合う場を設け、互いに自分が悪かったことを相手に謝り許し合った。帰りの会までに二人の関係が修復し、A児の「キラキラさん」の発言に至ったようである。

この二人の様子から、トラブルがあるということは、相手のことが気になり、相手と関わりたいという気持ちの表れであり、その解決を通して互いの理解を深めていることが見てとれた。つまり、トラブルも一つの間人間関係づくりの一因となる。このA児の発言は、児童の間人間関係づくりの過程を示唆している。

(2) 2学期の「キラキラさん」の実際

①発言しなかった児童への働きかけ

1学期、「キラキラさん」の時間に発言しなかった児童が10名いた。そこで、その児童がキラキラさんに気づくように、「先生キラキラ」として、児童の友達のことを思う優しい行為を紹介した。また、I児のように積極的に友達の様子を見つけて発言する児童に対しては、まだ言われていない児童の様子に気づかせるような声かけをした。その結果、これまで自分から発言しようとしなかった児童が少しずつ発言するようになっていった。

②「優しさの花」による視覚化

10月は、「優しさキラキラ」を取り上げ、児童が発言した「キラキラさん」を図2のように記録した。花びらにはそれぞれ児童の名前が記されている。発言した人と言われた人を線でつなぐと大きなひまわりのような図ができた。これを「優しさの花」と名付け掲示した。この「優しさの花」では児童同士のつながりが見え、児童は、友達とのつながり具合を確認していた。

「優しさの花」は、道徳の授業（実践⑨）の終末に児童に紹介し、その後は、優しい行為が分かる写真とともに教室内に掲示した。この道徳の授業については、後で記述する。

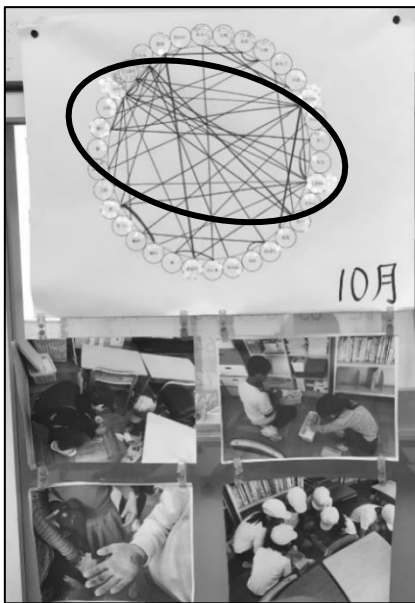


図2 教師が作成した「優しさの花」と

優しい行為が分かる写真の掲示物

③カードに感謝した気持ちを表す

11月、学級では、校内の人権月間に合わせて、児童との話し合いの結果、「1週間に1つは優しさキラキラを見つけよう」に取り組んだ。そして、その「優しさキラキラ」がどのようなキラキラだったのか具体的な内容が分かるように、カードに書く活動を行った。カードには、その時の気持ちも書くようにした。これに合わせて、帰りの会では、その時の気持ちも言うように促した。

カードに書ける児童は、休み時間や放課後に意欲的に書いていた。また、掲示してあるカードを参考にしながら、自分のカードを書いている児童もいた。

このように活動の手段を変化させたことにより、これまで積極的ではなかった児童が意欲的に活動に取り組めるようになった。（図3）

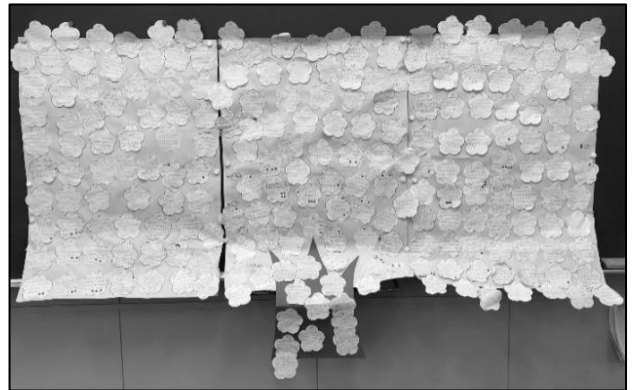


図3 児童がカードに書いた「優しさキラキラ」

(12月5日撮影)

(3) 日々の活動「キラキラさん」における考察

1, 2学期の取組により、児童は、毎日の生活の中で「キラキラさん」を意識するようになっていった。特に、優しい行為を意識する児童が増えてきた。

図4は、本学級の児童が「キラキラさん」として発言した総数をもとにした「遊びキラキラ」「優しさキラキラ」「その他のキラキラ」の発言数の割合を表したものである。それを二か月毎に示している。

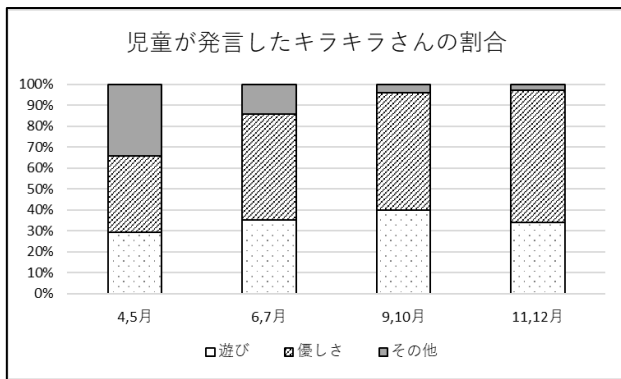


図4 児童が発言した「キラキラさん」の割合

図4を見ると学級の「キラキラさん」全体に対して、「優しさキラキラ」の割合が徐々に高くなっていることが分かる。このことから、「キラキラさん」が、児童の中で質的に見て変化してきたことが言える。

また、次の図5、図6、図7は、学級の「キラキラさん」の総数に対して、A児、B児、C児が二か月の間に他の児童に言われた「キラキラさん」が、全体の中でどれくらいの割合となっているのか、その変化を示したものである。

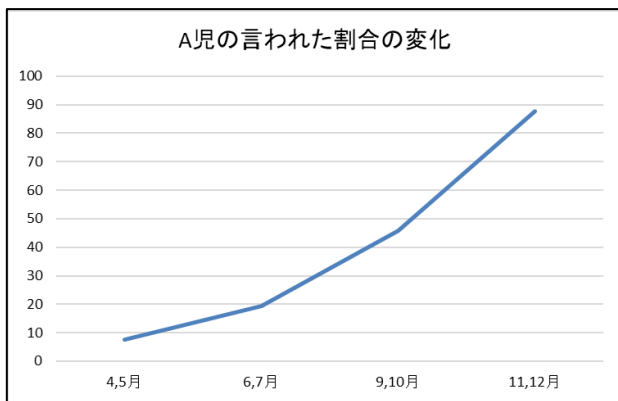


図5 A児の言われた割合の変化

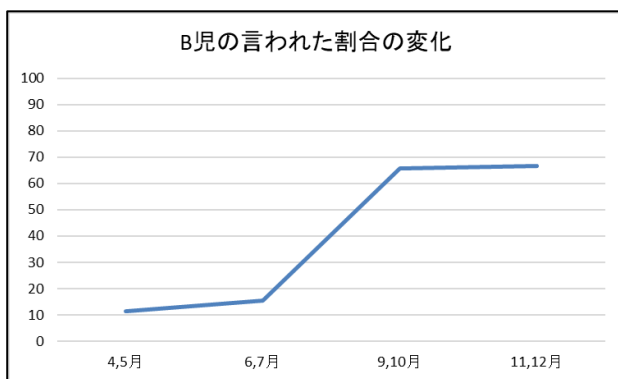


図6 B児の言われた割合の変化

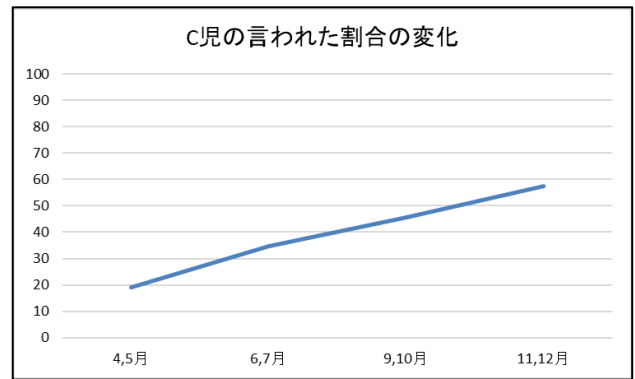


図7 C児の言われた割合の変化

これらの図から、A児、B児、C児それぞれが他の児童から言われる割合が高くなっている。特に、A児は、11、12月には、ほぼ毎日何度も「キラキラさん」として登場することになった。これは、A児が他の児童から注目して見られる存在となったことを表している。A児は、いつも恥ずかしそうな様子を見せながらも嬉しそうに話を聞いていた。

その後、冬休みを挟み、3学期が始まると、A児の名前が挙がることは週に一度あるかなにかに激減した。同様に、B児やC児も言われる数は減った。しかし、どの児童も落ち着いた様子で学校生活を送っている。

このことは、改めて「キラキラさん」で言われなくても、学級の仲間への信頼が生まれ、居場所ができたことを示すものだとと言える。

また、A児、B児、C児の言われた「キラキラさん」は、始めは特定の児童からのものが多かった。しかし、だんだんと他の児童からも言われるようになっていった。やがて、彼らは、自分が言われたことで、今度は自分が発言しようとするものが多くなり、身近な特定の児童から他の児童へと目が向いていった。

これらことは、3名の児童が学級全体に目を向け溶け込んでいく過程を表していると考えられる。

このように、彼らが学級の他の児童に関心を向けるのと同時に、彼ら以外の学級の児童同士にもどんどんつながりができるようになった。学級全体として、1学期、言われる児童は、

学級の中でも行動が目立っていた児童であった。しかし、2学期は、目立たないが気づいて行動できる児童にも目が向けられ、「発言する」「言われる」が繰り返され、それぞれの児童にも学級の中での居場所ができつつあったと言える。

2. 学級活動の授業

(1) 授業の実際

同一題材「友達ともつとなかよし」で授業を3回行い、繰り返した。ここでは、実践②、実践⑤、実践⑧について述べる。

①課題が見えた1回目の授業(実践②6月11日)

本授業は、「すごろくトーキング」を中心活動においた。「すごろくトーキング」というのは、サイコロを振り、4人グループですごろくをし、話したり聴いたりする活動である。すごろくシートには、質問内容やグループで取り組む課題が書かれている。児童は、すごろくの到着地点に書いてある内容を質問し合い、話したり聴いたり、グループで力を合わせてパフォーマンスをしたりした。

授業後、「みんなと楽しくできて(すごろくを)5回も(ゴールに)いって嬉しかったです」や「みんなと楽しくできて良かったです」などとふり返る児童が多く、児童にとって楽しい活動になった。

しかし、楽しければなかよくなれるわけではなく、児童と「友達」や「なかよし」の意味についてさらに考えていく必要性を感じた。そのために、「聴くこと」を徹底させることやふり返る時間を確保することを次の課題とした。

この時間の授業の流れは、右の図8の通りである。

4. 本時の学習

(1) 本時のねらい

・自分のことについて話したり、友達の話聴いたりすることを通して、さらに人間関係を深めようとする意欲をもつ。 【関心・意欲・態度】

(2) 準備物

ルール用紙(提示用)、アンケート結果(提示用)、ワークシート、サイコロ、すごろく

(3) 展開

時間	学習活動	●評価(評価方法) ○支援 ・指導上の留意点	視点
5	1. ウォーミングアップをする。 ・「うし」と「うま」ゲームのルールを知る。 ・「うし」と「うま」ゲームをする。	・ルールは提示しておく。 ・ゲームをペアで行い、心と体の準備をする。 ・ルールを守り、話をよく聴いている児童を褒める。	
7	2. 本時のねらいを知る。 ・友達アンケートの結果から、気づいたことを発表する。 C:殆どの人には、クラスに友達がいるんだな。 C:友達をふやしたくない人もいるんだな。どうしてかな? <ともだちのことを知って もつとなかよくなるよう>	・アンケートの結果をもとに、学習の必要性を考えさせる。	①ア
20	3. すごろくトーキングをする。 ・ルールを知り、活動する。 C:へーそりなんだ。 C:ぼくは、〇〇さんとすきなことがおんなじだ。 C:今〇〇さんと〜してみたいな。	・ルールについて簡潔に説明する。 ・速くゴールすることが目的ではなく、互いの話を聴き合うことが大事であることを意識させる。 ・モデリングをしてやり方を示す。 ・ はなしかたあいうえお ききかたあいうえお を意識させる。	②イ

		・ルールを守り、協力しているグループを褒める。 ○何を言っていないかわからない児童がいた場合はグループで助けることを伝える。 ・自由に感想を伝え合い、お互い感想を認め合うように声をかける。 ・児童の言葉に共感したり、児童同士の言葉をつなげたりする。 ●互いのことを知り、友達とよりよい人間関係を築こうとしている。【関心・意欲・態度】 (発言・発表・ワークシート)	
8	4. 学習をふり返る。 ・感想をグループで交流する。 ・全体で交流する。	・学習をふり返り、今日勉強して分かったことや思ったこと、友だちのすてきななどを数人の児童に発表させ、本時の学びを実感させる。	
5	5. 学習のまとめをする。 ・ふり返りを書く。 ・ともだちめあてをもつ。 () したら、きっと、ともだちともつとなかよくなれるよ。	・今日、グループで、そして全体で互いを思って聴き合った姿勢を褒めることで、今後も日々の活動の中で友達のステキを見つけていこうとする意欲をもたせる。	③イ

※授業の視点

- ①本時でつきたい力の明確化 ア課題
本時の課題を理解することができたか。
②対話 イ対話を通して深める
友達のことを新たに知ることができたか。
③学びの自覚 イふり返り
友達作りへの思いを深めて、自分の気持ちを表現することができたか。

図8 学級活動の授業の1時間の流れ

②「聴くこと」⇒「優しい反応」の共有化

6月14日の国語の授業中、発表者が何か言っても何も反応がないと他の人は分かっているのか、分からないのか、聴いているのか、聴いていないのかが分からないということが問題となった。

やはり「聴く」には、それを示す何かしらの反応が必要だということで、児童と「優しい反応」の共有化を図った。共有化した「優しい反応」とは、うなずきの他に「はい」「わかりました」「うん」「たしかに」「なるほど」などの言葉の反応である。

③課題を生かした2回目の授業（実践⑤7月18日「シェアタイム」と「なかよし度」）

道徳の授業とも引き続き関連を図り、児童と「友達」や「なかよし」についての話し合いを重ねた。本授業では、中心活動を1回目と同じ「すごろくトークン」とし、「優しい反応」を意識させた。

また、実践②の課題をふまえて、「シェアタイム」という授業の終末にペアの友達と学習をふり返って話をする時間を設けた。児童は、お互いに話したことや聴いたことをもとにして、ふり返りシートに自分のまとめを書くことができた。

さらに、自分なりの「なかよし」について考えること、一人ひとりが学級全体を見ることを促す手立てとして「なかよし度」を考える時間を設けた。「なかよし度」とは、児童一人ひとりに学級の皆がなかよしだと思うかどうか10点満点（※）で評価させたものである。

（※0…全然なかよしではない、10…とってもなかよしである。）

④抽出児童の前向きな反応が見られた3回目の授業（実践⑩10月18日）

本授業では、中心活動をジャンケンの相手と会話をし、サインをし合う「ジャンケンサイン大会」とした。

授業後、B児は、「優しい反応ができ、友達の話を最後まで聴くことができた」とふり返っていた。また、「いろんな人としゃべったら友達ももっと仲良くなれる」と考えていた。さらに、「今日は、話をできた人が3人で少なかったけれど、話すことができて良かった」とふり返り、なかよし度を10としていた。

また、A児は、「優しい反応ができた」「みんなと楽しくできた」とふり返っていた。

これらの抽出児童の前向きな反応から、1時間の授業の流れはそのままに、中心活動だけを変えたパターン化された流れも児童の理解を助け、満足度につながったのではないかと考える。

(2) 授業における考察

これまで、学級活動の授業後やアンケートで、「なかよし度」について考えてきた。下の図9は、「なかよし度」の学級平均である。

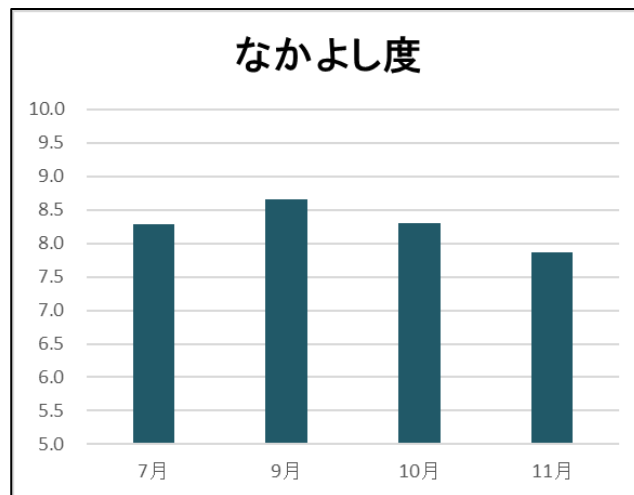


図9 「なかよし度」の学級平均

図9を見ると、学級の「なかよし度」は、7月、9月と上昇し、10月、11月と下降している。7月、9月と上昇したことに関しては、「(授業での活動が)楽しかった」という言葉が多かったふり返りより、児童は「友達と楽しく遊べたからなかよしだ」と考えたのだと思われる。

つまり、「友達」と活動した楽しい気持ちが心に残り、「この学級はなかよしだ」ととらえたのだと考える。

しかし、その後、「なかよし度」は下降している。これは、児童の中で「友達」の意味が広がり、「なかよし」が「遊ぶこと」だけではないという思いがうまれてきたからだと思われる。

つまり、「なかよし度」の学級平均の数値は下がったのだが、児童が授業の中で、「なかよし度」を意識しながら活動を行ったことが、自分なりの「友達」や「なかよし」の意味について考え、学級を客観的に見ることができるようになった結果として考える。

このことは、実践⑩11月8日の授業（後で記述する）で明らかとなる。

3. 道徳の授業

(1) 授業の実際

内容項目A「個性の伸長」に関する授業を3回、内容項目B「友情、信頼」に関する授業を2回、内容項目B「親切、思いやり」に関する授業を1回、計6回行った。

ここでは、児童の変容が大きく見られた実践③、実践④、実践⑨、実践⑩、実践⑫について述べる。

①「友達」について考える（実践③6月21日）

本授業は、内容項目B「友情、信頼」に関して、「友達」について考えた。教材文で人物の気持ちを考える前にまず、「友達とはどんな人のことなのか」について話し合った。児童からは、「一緒に遊ぶ人」「一緒にいる人」「信じ合う人（親友）」などといった答えが返ってきた。しかし、過半数の児童は「友達とはどんな人のことなのか」が言えなかった。

しかし、教材文で登場人物の気持ちを考え、授業の終末にもう一度問うたところ、児童は、「友達は見捨てない人だ」「助けたり助けられたりする人だ」などと発言した。

授業を通して、日々の活動の中においても、行為について児童に気持ちを問うことで、児童の意識の中で、学級の「友達」の意味が広がっていくのではないかと考えた。

②友達のよいところを見つける（実践④7月5日）

本授業は、内容項目A「個性の伸長」に関して、友達のよいところを見つけることをもとにして価値を考えた。児童にとって自分のよいところを言ったり書いたりすることはなかなか難しい。そこで、友達から自分のよいところを教えてもらう「友達のステキ見つけ」の活動を取り入れた。

B児は、「字がきれい」「いつも笑顔だ」「一緒に登校するのが楽しい」といった言葉をもらい、「ぼくは、字がきれいです（と書いてあるところ）がいっぱい書いてあったからこれからも字をきれいに書いていきます。」とふり返っていた。

また、A児も「優しい」「勉強を頑張っている」「バスケが強い」「真面目」などの言葉をもらい、「（自分が）よく書けたから良かったです。」とふり返ることができた。

A児も授業には参加し、友達のよいところを書いてはいたのだが、平仮名がおぼつかないため、数名の児童に「読めない」と言われた。A児は、きまりの悪そうな様子で何も言うことができなかった。そこで、筆者は、「読めない」と言った数名の児童に「Aさんはこう言っているんだよ」と字を直し、A児が書いたことを伝え直した。

③「キラキラさん」の質を高める（実践⑨10月25日）

本授業では、教材文「かっぱわくわく」（『新しい道徳』（東京書籍））を用い、困っている相手に、進んで優しく親切にしようとする心情と態度を育てることをねらいとした。内容項目B「親切、思いやり」に関して、「キラキラさん」の質を高めることを意識した授業である。

抽出児童の目標、目標に対する支援と評価は、児童の実態をふまえて、表5のように設定した。

表 5 抽出児童の目標、支援及び評価

	本時の目標	目標に対する支援	評価
A 児	・困っている相手にやさしく親切にする 主人公の親切に共感することができる。	★範読は、三回に分ける。 ★範読の際は、挿絵や登場人物の顔の絵や名前の視覚的手立てを工夫する。 ★事前にかっぱのことやわくわく水のこと等お話に出てくる言葉に簡単な説明をしておく。 ★やさしさの花の掲示用紙を示し、学級の友達同士がつながっていることが理解できるようにする。 ★思ったことを自分の言葉で表出することで、自分が言えた、言うことができたという実感をもたせる。	◆困っている相手にやさしく親切にする主人公の親切に共感している。(発言)
B 児	・場面の中の親切にしたりされたりしたときの気持ちを考えることで親切のよさに気づく。	★範読は、三回に分ける。 ★範読の際は、挿絵や登場人物の顔の絵や名前の視覚的手立てを工夫したり、かっぱのわくわく水のこと等お話の言葉に簡単な説明を加えたりする。 ★やさしさの花の掲示用紙を示し、学級の友達同士がつながっていることが理解できるようにする。	◆場面の中の親切にしたりされたりしたときの気持ちを考えることで親切のよさに気づいている。(発言・ノート)
C 児	・ふわふわ言葉の「どうぞ」や「ありがとう」を言うことができる。	★通訳の方をお願いします。 ★ふわふわ言葉が言える場面を設定する。 ★範読の際は、挿絵や登場人物の顔の絵や名前の視覚的手立てをする。 ★シェアタイムで「がんばりました」と言うことでみんなと勉強できたという実感をもたせる。	・ふわふわ言葉の「どうぞ」「ありがとう」「がんばりました」を言っている。(発言)

導入として教材文の登場人物や冒頭部分のイラストを見せたり文を読んだりすることでどんなお話なのかを考えさせた。教材文を読み進める中で、児童の言葉を取り上げ、「優しい行為をしたりされたりするとどんな気持ちになるのか」というめあてとした。

授業では、登場人物の優しい行為を見つけ、その時、その時の気持ちを考えていった。この授業では、通訳者をつけることができたため、C児を含めた学級の全員が授業に参加することができた。

ここで注目したいのは、C児を見守る他の児童の様子であった。授業前半、C児が手を挙げた時にすかさず、「あっ、Cさん(が手を挙げている)」と発言する児童がいた。これは、児童がC児をよく見ていることを表している。また、C児が指名され、なかなか日本語が言えなかった際に、他の児童はC児が言葉を発するのを待っていた。これはC児に対する他の児童の温かい気持ちの表れだったと考える。授業後半、通訳者を通して、C児が考えを述べようとした際も、他の児童は、C児の考えに耳を傾けていた。

これらの様子は、学級の児童のC児を受け入れる気持ちが育ってきた結果だと言える。

通訳者を通して、C児は、「優しくすること友

達を助けることについて勉強しました。ぼくも友達を助けたいです。」とふり返った。

A児は、ふり返りの場面で、何を書けばよいか迷っていた。「かんすけ(登場人物)のことをかいたらどうかな」と声かけをしたところ「ぼくは、(登場人物のかんすけが)いい人だと思いました。わけは、いろんな動物にかんすけが水をあげたからです。」と登場人物の優しい行為に共感するふり返りを書くことができた。

このことから、A児は、友達の話を聞きながら、話の内容をある程度理解することができ、主人公の親切に共感できたと言える。

また、B児は、「ぼくがかんすけ(登場人物)だしたら、けがをしている人を見つけたらすぐに水で洗うと思います。わけは、そういうことをしたら自分がやった分自分に返ってきます。ぼくは、これからけがをしている人を見つけたらすぐに手当てをします。」とふり返った。

B児は、自分事として考え、自分がしたい優しい行為について考えることができた。これは、授業の終末に「優しさの花」(図2)を提示したことが関係していると考えられる。以前に、B児は遊びの中でけがをした友達に傷口を水で洗うことを教えていた。つまり、B児の中で教材文と「優しさキラキラ」が繋がったのである。

他の児童のふり返りの中にも、「優しさキラキラ」を想起させるものが多くあり、この授業は、「キラキラさん」の質を高めるための意味のある授業になったと考える。(表6)

表 6 児童の授業後のふり返り(一部抜粋)

<p>・わたしは、誰かに優しい行為をもらったら、次は自分が人に優しい行為をしてあげたいです。(Q児)</p> <p>・すつくとざんざとかんすけはいいなあと思いました。わけは、お互いに分け合っていたからです。(R児)</p> <p>・最後のすつくとざんざがいいと思いました。わけは、かんすけのわくわく水がなかった時に分けてあげたところが優しいと思ったからです。(T児)</p>

④「なかよし」の質が変わる（実践⑩11月8日）

「なかよし度」の数値は、児童個人でみると前回よりも上がる児童もいれば下がる児童もいた。学級活動の授業における考察でも述べたが、学級平均でみると、10月、11月と「なかよし度」は、下降していた。（図9）

そこで、本授業では、内容項目B「友情、信頼」に関して、「なかよし度」をもとにして、「なかよし」について考えた。

「なかよし度」の数値が下がった児童からは、「喧嘩がある」「悪口を言ってしまう」という理由が出た。その中で日頃あまり発言しないG児が「譲り合いがまだできていないからです。」と発言した。「譲り合い」という言葉の意味を尋ねたところ「相手のことを考えて自分がちょっと我慢することです。」と答えた。その後、発言した数人もG児が発した「譲り合い」という言葉を使って理由を言っていた。

次に、数値が上がった児童に聞くと、「このクラスは、よいところがたくさんあるし、優しい人も増えてきている」「優しい行為はたまにできないことがあるけど、『譲り合い』や『優しさキラキラ』をしている人がたくさんいる」などと日々の活動を意識して答えている児童がいた。

最後は、「もっと譲り合いをしたい」「男子と女子関係なくなかよくなることが大事だ」という結論に達した。

この話し合いから、児童の中で「友達と楽しく遊べることがなかよし」という単純だった意味が変化し、2学期以降の「なかよし」の意味の深まりが確かめられた。

⑤「自分」について考える（実践⑫12月6日）

本授業では、内容項目A「個性の伸長」に関して、友達に見つけてもらったステキから、「自分」について考えた。表7は簡単な授業の流れである。

表7 授業の流れ

- | |
|---|
| ①めあて確認
〈自分はどんな人なのかな〉 |
| ②考える
活動① 自分がどんな人かを考える。
活動② 友達に9つの言葉（優しい、しっかりものなど）の中から選んでもらう。
（友達について考える）
活動③ もらった言葉から再度自分がどんな人かを考える。 |
| ③まとめ |
| ④ふり返り |

児童には、「友達のステキ見つけ」（実践④，実践⑦）の活動経験があったため、流れはスムーズであった。この授業のポイントは、まず、「自分」について考え、次に「友達」から言葉もらい（友達について考える）、最後にもう一度「自分」について考えることであった。

授業では、始め、「自分」について考えた際に、言葉を選べなかった児童が数名いた。しかし、友達から言葉もらうことで、最後には全員が「自分」について考えることができた。

表8は、児童の授業後のふり返りである。

表8 授業後のふり返り（一部抜粋）

- | |
|---|
| ・私は、優しいや親切やしっかりものなど <u>自分のことが分かってよかった</u> です。最初は自分がどんな人なのか迷ったけど優しい人が一番多かったので <u>自分は優しいのかな</u> と思いました。（D児） |
| ・私は、自分のことを優しい人や元気な人やさわやかな人だとは思っていなかったから嬉しいです。（E児） |
| ・ぼくは、 <u>自分のことが分かりました</u> 。今までは自分のことはあまり分からなかったです。（F児他多数） |
| ・みんないろいろちがっていいと思いました。（B児） |

(2) 授業における考察

実践⑩までの授業を終え、児童の「友達」の意味のとらえに大きな変化が見られた。(表 9)

表 9 児童の「友達」の意味のとらえ

6月21日 (道徳)	
問い	問いの答え
友だちってどんな人なのかな?	<ul style="list-style-type: none"> ・一緒に遊ぶ人 ・一緒にいる人 ・いい人 ・信じ合う人 (親友) ・<u>わからない 過半数</u> 授業後一見捨てない人、助けたり助けられたりする人
9月21日 (アンケート実施)	
アンケートの設問	アンケートの回答
あなたにとって友だちってどんな人のことですか?	<ul style="list-style-type: none"> ・遊んでくれる人 (10人) ・やさしい人 (6人) ・助け合う人 (3人) ・なかよく遊ぶ人 ・分からない時教えたり相談したりする人 など ・<u>わからない 3人</u>
あなたにとってなかよしいってどういう意味ですか?	<ul style="list-style-type: none"> ・いっしょに遊ぶこと (10人) ・助け合うこと (7人) ・やさしくすること ・人の気持ちがわかること など ・<u>わからない 11人</u>
11月22日 (アンケート実施)	
アンケートの設問	アンケートの回答
あなたにとって友だちってどんな人のことですか?	<ul style="list-style-type: none"> ・やさしい人 (11人) ・大切な人 (9人) ・遊んでくれる人 (8人) ・助け合う人 (5人) ・一緒に遊ぶ人 (4人) ・いい人 (2人) ・助けてくれる人 ・親切な人 ・明るい人 ・楽しい人 ・けんかしてもなかなおりする人

実践③の授業において、「友達ってどんな人なのかな」という問いに対して、「分からない」と答えた児童は、過半数であった。しかし、9月のアンケートでは、3名に減り、11月のアンケートでは、皆無となった。

また、その意味のとらえが「遊ぶ人」以外にも「助け合う人」「やさしい人」「大切な人」「けんかをして仲直りする人」などへと広がっていることが分かる。これらのことは、授業の中で、「友達」や「なかよし」について考えたことが、児童の「友達」の意味を深めたと言える。

さらに、意味だけではなく、実際の友達のことを理解できるようになったとも言える。その理由として、授業を積み重ねる毎に、友達のこと気づくようになり、「キラキラさん」での発

言数が増えたことが挙げられる。実践⑨以降は、「キラキラさん」への気持ちも表出したことで、言われる児童にとっては、より嬉しいものになった。言われた児童は、「嬉しい」気持ちが膨らみ、また優しい行為をしようと思えばその質が高まっていったのだと考える。

表 10 は、実践⑨以降の11月の「キラキラさん」での発言の一部である。1学期、学級の中で一番他の児童から言われていたにも関わらず、一度も発言しなかったK児が発言するようになった。K児に加えて、これまであまり発言しなかった他の児童も発言するようになっていった。これらのことは、自分がした行為が他の児童のいい気持ちとなっていることが分かり、自分もお返しに発言して友達をいい気持ちにしたい、自分もいい気持ちになりたいという気持ちが高まったからだとも考えられる。

授業以外での児童の変容から、児童が授業をきっかけとして考えたことが、実生活でもいきる場面としてあり、それが学級の中で、自然な形で表出していったことが見てとれる。

表 10 11月の「キラキラさん」 (一部抜粋)

B児：今日のキラキラさんは、Aさんです。わけは、バスケットをまぜてと言ったらいよいよとってくれたからです。その時ぼくは、嬉しい気持ちになりました。

K児：今日のキラキラさんは、Cさんです。わけは、みんなのために雑巾をたたんでいたからです。ぼくは、それを見てみんなのことを考えているなあと思いました。

さらに、授業では、繰り返し、「友達」や「自分」について考えた。その結果、これまでの振り返りからも分かるように、児童は、友達からの言葉で自分のよさに気づくことができるようになったり、人によって自分の見方が違うことや自分が思うのと友達が思うのとでは違うことなど、「自分」や「友達」についての理解を深めたりできた。

これらのことから、児童に日々の生活と道徳

を関連させながら、「自分」と「友達」について繰り返し思考させることは、安心して学べる学級づくりにおいて、非常に重要な鍵となることが示されたと言える。

V 全体的考察

1. 抽出児童の変容

A児の大きな変容として、1学期に比べて、友達とのトラブルが減ったことが言える。A児は、11月の友だちアンケートの中で、「友達は10人いる」と答えている。「友達は優しい」「友達といると嬉しい」「楽しい気持ちになる」と述べていることからA児を理解する児童が増え、それをA児も実感していることがうかがえる。「友達が自分を認めてくれること」がA児にとっての安心感につながっていると考える。

12月13日、A児が、「先生、ぼくは、言葉の教室へ行く時間が分からない（忘れてしまう）のでいつ行くか名前を黒板に書いて下さい。」と言った。自分が分からないことを分からないと言え、こうしてほしいと願い出るA児の姿は、学年当初には想像もつかなかった。この発言は、A児の大きな成長を示したものであった。

A児は、自分のことが少しずつ理解できるようになり、周りの児童もA児を理解するようになったのだと考える。その結果、A児は、学級の児童の前で自分の思いや考えを表出できるようになったと思われる。

B児についても、友達とのトラブルは減った。学年当初、友達と関わりたいのだがなかなかうまく表現できなかったB児は、現在、友達と友好的な会話ができるようになり、話し合いにも参加できるようになった。

道徳の授業の考察でも述べたが、1学期には、「字がきれい」と友達に認められ、2学期には、B児自身が「みんないろいろちがっていい」と友達の多様な考えを認めることができるようになった。友達に認められ、自分も友達を認めることができるようになったことがB児の大きな成長であると考えられる。

平成31年1月8日、B児は、「冬休みに書初めの字の練習をいっぱいしたよ。だから、絶対に金賞をとりたいんや。」と話していた。書初め大会では、集中して、力強く整った字を書くことができた。そして、見事金賞に選ばれ、大喜びしていた。他の児童もB児を称賛していた。B児もまた学級での自分の居場所を見つけたのである。

C児にとって、学級の皆とのつながりは、「キラキラさん」の時間だけであった。C児は、「キラキラさん」を媒介にして、学級の児童とつながっていった。

学年当初、C児には、「キラキラさん」自体何のことだか理解できなかった。しかし、だんだんと「自分のことで、よいことを言われているんだ」ということを感じ取り、自分の名前が言われると嬉しそうに聞くようになっていった。それがやがて、「遊びキラキラ」を発言するようになり、現在では、言いたい日は進んで発言しようとするまでになった。

図10は、C児が「キラキラさん」で発言した割合の変化である。これを見ると、C児が月をおうごとに発言しようとしてきたことが分かる。

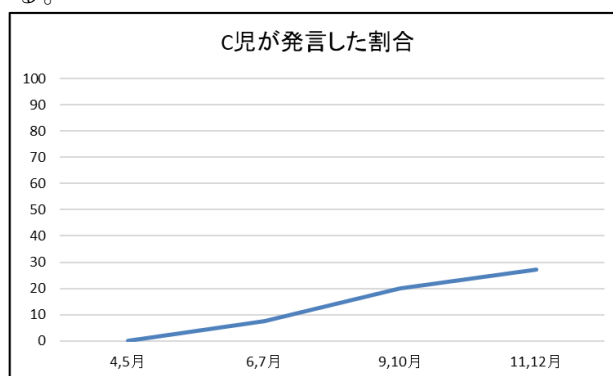


図10 C児が発言した割合の変化

通訳者を通じた面談で、C児は、「友達」を「遊んでくれる人」「楽しい人」ととらえ、「友達が4人いる」と答えている。そして、「友達といると嬉しい」「楽しい」「安心した気持ちになる」と答えている。現在、C児は、休み時間に友達と元気に遊び、学級の中に溶け込んでいる。

表 11 抽出児童の目標と実践結果

	A児	B児	C児
目標	<ul style="list-style-type: none"> ・できることや分かることを増やす。 ・言葉や行動で友達とコミュニケーションがとれる。 ・話を聞くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と友好的な会話ができる。 ・話し合いに参加することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の学校での過ごし方が分かる。 ・ルールにのっとって遊ぶことができる。
実践結果	<ul style="list-style-type: none"> ・自分自身のことが少しずつ理解できるようになった。 ・自分の考えを表出できるようになった。 ・友達とコミュニケーションがとれるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と友好的な会話ができるようになった。 ・話し合いに参加できるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ほぼルールを理解し遊ぶことができるようになった。 ・他者のよいところをまねて行動できるようになった。

抽出児童には、それぞれに困り感があった。しかし、これらの実践の中で彼ら自身が考え、彼ら自身が「学級の中で自分は認められている」「学級の中に自分の居場所がある」ことを実感していった。

その結果、落ち着いて過ごすことができるようになり、彼らにとって、本学級が安心して学べる環境になっていったのだと考える。

以上の考察をふまえ、上の表 11 に抽出児童についての実践結果を示す。

2. 学級全体の変容

3 学期に入っても「キラキラさん」は、継続している。興味深いことに、3 学期の「キラキラさん」の総数は、2 学期に比べ激減している。

しかし、落ち着いて過ごしている学級の児童の様子から、児童の中で「キラキラさん」が当たり前のこととして浸透してきたことが言える。今後も、児童の様子を見守りつつ、学級担任として次へのステップに向けて働きかけを工夫し、継続していきたい。

これまでの考察でも述べたように、学年当初、トラブルが多く、思いや考えがバラバラだった学級の児童が、お互いのことによく気づけるようになってきた。また児童に学級全体を「友達」

という一つの集団としてとらえる目も育ってきた。

さらに、「なかよし」という人間関係についても単なる遊びのメンバーではなく、喧嘩も含めた思いやりの深い部分に気づく児童へと変容し、行動にも表れていった。(図 11)



図 11 自主的に活動する児童

12月、保護者アンケートで家庭での様子を聞いた。すると、85%の保護者が4月に比べ、児童の様子に心の成長が見られたと答えた。保護者とは、おたよりを中心に連携を深めてきたが、この連携も安心して学べる学級づくりを助けるものとなったことは言うまでもない。(表12)

表12 保護者の声(一部抜粋)

- ・ 思いやりや協調性が身についた。
- ・ 相手の気持ちを思いやれるようになった。
- ・ 友達とのトラブルが減ってきている。
- ・ 相手のことや状況を考えて発言したり、行動したりできるようになってきている。
- ・ 自分の考えや思いを自分の言葉で伝えようという意思が感じられる。
- ・ 学校での出来事を話してくれず勉強や友達と仲良くできているのか気になっていたが、最近色々な友達や勉強の話をしてくれるようになってきたので安心です。
- ・ 友達のよいところをたくさん見つけて家で話している。
- ・ キラキラさんについては、始めはキラキラさんにあげてもらいたい思いからの行動であったが、みんなの役に立つ、認めてもらえる、喜んでもらえるという気持ちが最近のモチベーションになっているようです。
- ・ 目標を決めてそれに向かって頑張ろうとするようになった。

VI まとめ

1. 結論

本研究では、日々の活動「キラキラさん」を継続し、その活動と関連付けながら、授業実践に取り組んだ。これらの実践後、抽出児童は、

学級の中で、自分の居場所を見つけ、安心して学んでいる。また、他の児童にとっても本学級は、安心して学べる学級へと近づいたと考える。

2. 今後の課題と展望

特別なニーズのある子にとって、日々の活動とそれに関連付けた授業は、連続した日常生活において、思考がつながりやすかった。しかし、ただ関連付ければよいというものではない。個別の実態を把握し、保護者と連携を図り、目標を定め、支援計画を立てた上での実践が必要である。今後も日々の活動、各教科の授業において、安心して学べる環境づくりと働きかけを継続していく。

また、学級担任として、子ども達とともにつくる学級の中で、子ども達に、学級の中の「自分」と「友達」の存在の意味を問いかけながら学級づくりをしていきたいと思う。子ども達一人ひとりが希望溢れる未来を考えられるよう、指導、支援をしていきたいと思っている。

引用文献・参考文献

- 1) 菅野仁(2008)友だち幻想一人と人のくつながり>を考えるー。ちくまプリマー新書, 37.
- 2) 文部科学省(2018)小学校学習指導要領(平成29年告示)解説特別活動編. 東洋館出版社.
- 3) 文部科学省(2018)小学校学習指導要領(平成29年告示)解説特別の教科道徳編. 廣済堂あかつき.
- 4) 堀洋道監修/山本眞理子編(2001)心理測定尺度集I人間の内面を探る<自己・個人内過程>. サイエンス社, 16-22.
- 5) 浜谷直人(2013)仲間とともに自己肯定感が育つ保育. かもがや出版.